
俺たちのカード！！

FrangBeat

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺たちのカード！！

【Nコード】

N7686Z

【作者名】

FrangBeat

【あらすじ】

「武藤遊戯」「遊城十代」「不動遊星」「九十九遊馬」

のそれぞれと旅をした唯一のデュエリスト、桃里遊我。
彼の旅は終わったかに思われた。
だがしかし、再び彼の旅が始まる。

Episode：〇〇始まり〇〇（前書き）

この作品ではオリジナルカードが出てきます。
何か案があればメッセをお願いします。

その際、「カード名」「効果」「その他必要事項」を記載してください。

詳しくは活動報告に記載しますのでそちらをご覧ください。

Episode：0 ～始まり～

桃里遊我。

デュエリスト。

過去に活躍した「武藤遊戯」「遊城十代」「不動遊星」「九十九遊馬」のそれぞれと旅をしてきた唯一のデュエリスト。

「あの旅はすごい楽しかった・・・」

4人との旅を懐かしく、そしてたのしく思っていた。

「また旅がしたいな・・・」

そう思っていた。

<桃里遊我・・・お前にはやるべきことがある・・・>

「何だ?!」

突然に声が聞こえた。

<旅をするのだ・・・さらなる旅を・・・>

「何だ?! 誰だ!?! どこにいる?!」

不思議な声が聞こえた。

1話

-それは旅を終えた桃里遊我が家に帰宅した日のことだった。-

「一番遊戯さんとの旅が楽しかったな……」

カードを1枚取り出し見つめた。

「ブラック・マジシャン」

武藤遊戯のエースカード。

旅の記念にくれた。遊戯はまたブラック・マジシャンを手に入れる
といていた。

そして、

「E・HEROネオス」

遊城十代のエースカード。

「スターダストドラゴン」

不動遊星のエースカード。

「No.39希望皇ホープ」

九十九遊馬のエースカード。

歴世のデュエリストたちのエースカードを遊我は所持していた。

「俺のエースカード・・・BP-ゲイボルグ・・・ありがとな・・・」

桃里遊我のエースカード。

ブラック・パラディン
「BP-ゲイボルグ」

このカードに何度助けられただろう。

ピンチの時にドローすると必ず来てくれた。

「ありがとな・・・ゲイボルグ・・・」

そんな時・・・

<桃里遊我・・・お前の旅は終わっていない・・・>

「誰だ??!!」

何者かの声が聞こえた。

<また旅を始めろ・・・そして新たなるデュエリストたちと戦え・・・>

「新たなるデュエリスト??」

<ああ・・・そうだ・・・戦え・・・戦え!!!!>

「・・・わかった・・・」

この瞬間から彼。桃里遊我の新たな旅が始まるのだった。

2話　バカとテストと召喚獣の世界

謎の声に導かれて旅を始めた桃里遊我。

旅の最初に出会った人は優しい人だった。

「すいません。ここにデュエリストがいるって聞いたのですが。」

「ああ、それならあそこにいるよ。」

とその現地の人が指をさしたのは学校のような場所だった。

<ここは・・・・・・>

その建物には「文月学園」と書いてあった。

「文月学園・・・・？学校か・・・・」

ここにデュエリストがいるのかは正直怪しかった。

怪しかったが学園内に入ってみることにした。

すると・・・・

「ターンエンド！！」

という声が聞こえた。

「ほんとにデュエリストが存在するのか・・・・」

校舎内に入り、声が聞こえた場所まで行った。

そこに広がっていたのは、謎の空間でモンスターがバトルしている風景だった。

「なんだこれは!!??」

驚き声を出してしまった。

「だれ?!」

ガラッ

ドアが開き、遊我は見つかってしまった。

「……なんでこんなところにいるのよ。」

島田美波というその生徒は遊我に聞いた。

「俺は……ここにデュエリストがいると聞いてきたんだ。」

「デュエリスト? まあいるけど」

「デュエルしたいんだ!! できれば強い奴と!!」

うーん……とみんなが考えてる中、

「わかった!! 俺がやる!!」

と声を上げたのは吉井明久という人だった。

「手加減はしないぜ！！見ててね姫路さん。」

「はい。」

「じゃあ、開始しようか。」

「「デュエル！！！！」」

明久VS遊我のデュエルが始まった。

3話「バカとテストと召喚獣の世界」(前書き)

ほとんどセリフの章です。

なので「」の前にしゃべってる人の名前いれておきます。

この話で出てくる「BP」は「ブラックパラディン」と読みます。

3話「バカとテストと召喚獣の世界」

桃里遊我：LP4000

吉井明久：LP4000

明：「僕のターン！！ドロー！！」

（一体・・・何のデッキを使っているのかわからない・・・責める準備をしておこう・・・）

明：「フィールド魔法、幽獄の時計塔を発動！！」

遊：「D・HEROか。」

明：「D・HEROドレッドサーヴァントを召喚！！効果により幽獄の時計塔に時計カウンター1つを乗せる！！」

遊：「ふむ・・・」

明：「カードを1枚伏せてターンエンド！！」

遊：「ドロー。」

明：（奴は一体何のデッキだ・・・）

明：「スタンバイフェイズに幽獄の時計塔に時計カウンター1つを乗せる！カウンターは2つ！！」

遊：「別に大したことではない。魔法カード、おろかな埋葬を発動。」

デッキから、B Pゲイボルグを墓地に送る。」

明：「B P?!聞いたことないな・・・」

遊：「手札のB Pツインソードを墓地に送り、ダーク・グレファアを特殊召喚。」

明：「墓地操作系のデッキか・・・」

遊：「ダーク・グレファアの効果で、手札のデッド アライブを墓地に送り、デッキからB Pエンジェルソフィアを墓地に送る。」

明：「墓地がすでに4枚か・・・」

遊：「墓地のB PツインソードとB Pエンジェルソフィアを除外し、B Pゲイボルグを特殊召喚。」

明：（やばいな・・・負けるかもしれない。）

遊：「B Pソフィアジーニアスを召喚。効果により、お前のフィールドにいるD - HEROドレッドサーヴァントを破壊。」

明：「くっ!!!」

遊：「効果で相手に破壊したモンスターのレベル×300ポイントのダメージを与える。」

吉井明久：LP3100

遊：「魔法カード。サイクロンを発動。その伏せカードを破壊する。」

」

明：「くっ・・・聖なるバリアミラーフォース・・・」

遊：「墓地のデッド アライブの効果を使い、デッド アライブを除外。除外されているツインソードとエンジェルソフィアを墓地に戻す。再び除外し、B P ツインソードを特殊召喚。」

島田美波：「明・・・」

明：「やばい・・・このままじゃ・・・」

明：（手札にはバトルフェーダー・・・このターンはしのげる・・・）

遊：「甘い・・・魔法カード手札抹殺。お互いに手札をすべて捨てて、その枚数分ドロースする。俺はドロースはなし。」

明：（！！！！バトルフェーダーが！！！！）

遊：「やはりバトルフェーダーがあつたか。バトル！！B P ツインソードでダイレクトアタック！！」

明：「うわぁ！！！！」

吉井明久LP：100

遊：「B P ゲイボルグでダイレクトアタック。」

明：「うわぁぁぁ！！！！！！」

吉井明久LP：0

遊：「何だ。この程度か。強いんじゃないかったのか。吉井明久。」

明：「くそっ……負けた……強い……」

姫路：「あなたはいつたい何者なんですか?!」

遊：「桃里遊我。旅をしながらデュエルをしている。」

美波：「旅の目的は??」

遊：「目的……わからない……」

美波：「わからない?!」

そう。桃里遊我は旅の目的を知らずに今、吉井明久とデュエルをしていた。

遊：「目的……」

明：「とりあえず、たのしいデュエルだった。僕もその旅に参加したいな。」

美波：「うちも!!」

秀吉：「わしもじゃ。」

姫路：「わ、わたしも……」

土屋：「俺も行くかな。」

雄二：「なんだ？？旅か？？俺も行くぞ！」

気が付けばこんなに集まっていた。

遊：「まあいい。大勢の方が早く目的もみつかるだろうしな。」

明：「よし！改めて自己紹介をしよう。僕は吉井明久。」

姫：「私は姫路瑞希。」

美：「うちは島田美波。」

秀：「わしは木下秀吉じゃ。見ての通り男じゃ。」

遊：「え？男だったのか・・・てっきり女の子かと。」

秀：「おぬし初対面であろっ・・・初対面の奴にもいわれるのか・・・」

土：「俺は土屋康太。ムツツリー二と呼ばれている。」

雄：「俺は坂本雄二だ。」

遊：「よろしくな。それぞれ使うデツキ教えてくれ。」

明：「僕はさっきので知ってると思っけどD・HEROだよ。」

姫：「私はアルカナフォース。」

美：「うちはサイキック。」

秀：「わしは忍者じゃ。」

土：「俺はSIN。」

雄：「俺はインフェルニティ。」

ちよつと・・・私を忘れてない・・・？雄二・・・

雄：「げっ！！翔子！！！」

翔：「私は霧島翔子。使用デッキはトークンデッキ。旅についていく。さ、雄二。こつち・・・」

雄：「いや！翔子！やめ！やめろおお！！！」

こうして文月学園F組の主要面子が旅の仲間になった。

4話　けいおんの世界

文月学園Fクラスの仲間たちと一緒に旅をすることになった桃里遊我。

ずっと歩いていると世界が変わった。

「ここは・・・？」

見ると変わった街だった。

そこには「私立桜が丘高等学校」と書いてあった。

「女子高か・・・」

突然・・・

ボタン！！

「何だ?!」

ムツツリーニが鼻血を出して倒れていた。

「ど、どうした・・・？」

「ああ。いつもこんな感じじゃ。気にせんでくれ。」

「あ、ああ・・・」

少し入ることに気が引けたが、デュエリストの勘が呼んでいた。

「ここにデュエリストがいる」

と。

丁度私立桜が丘高等学校では学園祭が行われていた。

講堂に行ってみると、

「ふわふわタイム♪♪」

放課後ティータイムと呼ばれるバンドがライブを行っていた。

「バンドか・・・少し見ていくか。」

「あの子の衣装可愛い♪」

「私も着てみたいです♪」

女子群。島田美波と姫路瑞希は話していた。

「今日は、放課後ティータイムのライブに来てくれてありがとうございます！
！！！これで終了です！！ありがとうございます！！」

「ライブが終わり」

「あの！」

「はい??」

遊我は放課後ティータイムのボーカル、平沢唯に声をかけてみた。

「ここにデュエリストっていますか??」

「ん??いるよ?? 私たち放課後ティータイムはみんなだよ??」

「マジで?!じゃあちよつとお願いがあつて・・・」

「ん??」

「俺たちとデュエルしてください!!」

「ん??いいよ??ちよつと待っててね??」

唯はみんなにその趣旨を伝えた。

「お前らか??デュエルしたいと言っているのは??!!」

「あ・・・ああ・・・」

「部長でドラムの田井中律だ。よろしく!!」

「よろしく。」

「ベースの秋山澪だ。」

「キーボードの琴吹紬です。」

「ギターの平沢唯だよ」

「同じくギターの中野梓です。」

「桃里遊我だ。」

「吉井明久だ。」

「姫路瑞希です。」

「島田美波よ。」

「木下秀吉じゃ。男じゃ。」

「え?! 男?!?! 女の子かと思ってた・・・」

「おぬしらまで・・・」

「土屋康太。」

「坂本雄二だ。」

「霧島翔子・・・」

「よろしく!!」

「さて、デュエルをはじめようか。」

「うん!!」

放課後ティータイムVS桃里遊我+文月学園のデュエル開始。

5話『けいおんの世界』（前書き）

再びここもわかりにくくなるといけないのでセリフの前に名前を入れます。

セリフだらけです。遊我が別のデッキを使い始めますwww

5話　けいおんの世界

遊：「じゃあ、組み合わせは・・・」

唯：「私と遊我君だろうか。」

遊：「ああ。」

漣：「なら私が明久君と。」

明：「うん。」

紬：「じゃあ、私が姫路さんと。」

姫：「はい。」

律：「じゃああたしは、雄二君かな??」

雄：「おう。」

梓：「じゃあ・・・島田さんとで・・・」

美：「や、やってやるわよ!」

土：「あれ??俺は???」

翔：「私も・・・余った・・・」

とりあえず余った二人は置いて・・・

デュエルは開始された。

各々やっているが、遊我VS唯を見ていこう。

遊：「よろしく。」

唯：「うんよろしく」

「デュエル!!」

平沢唯LP：4000

桃里遊我LP：4000

唯：「私のターン！ドロー！」

遊：（何のデッキだ・・・？）

唯：「魔法カード！おろかな埋葬を発動！」

遊：「ふむ・・・」

唯：「デッキからホワイトを墓地に送る。」

遊：「ホワイトか・・・」

唯：「ダーク・グレファアを召喚。手札のホワイトを墓地に送り、デッキからホワイトキングを墓地に送る。」

唯：「カードを1枚セットしてターンエンド！」

遊：「ドロー。高等儀式術を発動。」

唯：「はい。」

遊：「終焉の王デミスを指定。デッキからメカハンター2体を墓地に送る。」

唯：「ふんふん・・・」

遊：「デミスを召喚。2000ポイント払ってお前のフィールドのカードすべてを破壊する。」

桃里遊我LP：2000

唯：「やばい！」

遊：「そして、ブラック・ボンバーを召喚。」

唯：「まさか・・・」

遊：「墓地のメカハンターを特殊召喚。そしてレベル7シンクロ。」

唯：「なんか嫌な予感がする・・・」

遊：「現れよ！！ダーク・ダイブ・ボンバー！！！！」

唯：「やっぱり！！！！！！！！」

遊：「デミスでダイレクトアタック。」

平沢唯LP：1600

遊：「ダーク・ダイブ・ボンバーの効果でデミスをリリース。1600ポイントのダメージを与える。」

唯：「お、終わり・・・」

平沢唯LP：0

この勝負と同時にそのあとに文月学園のメンバーは全員勝った。

そして・・・

唯：「ふうん・・・旅をね・・・楽しそう!!」

律：「おう！行ってみるか!!」

漣：「ちょ！学校は!？」

律：「まあまあ。大丈夫だって!」

紬：「さすがに学校を抜けるのはちょっと・・・」

梓：「まずいと思います!!」

遊：「そうか。なら無理に誘わないよ。ありがとな。デュエルしてくれて。楽しかったぜ。」

唯：「うん!!またやろうね!!えっと・・・遊我君!!」

遊：「おう！！またな！！」

全員：「じゃ～～ね～～！！！！」

デュエルを終わらせて私立桜が丘女子高等学校を後にする旅人達。

次の世界は一体……

???：「くくく……負けるわけねえじゃん……だって俺王子だもん！！」

謎の笑い声と影がそこにあった。

6話「REBORN!の世界」

桜が丘女子高等学校を後にした桃里遊我＋文月学園は、次の世界にきた。

「さて・・・この世界は・・・?」

「ランボ!!!!そっち行くな!!」

「ランボさん遊ぶんだもんね!!!!」

ドスン!

「が・ま・ん・・・痛ああいいい!!!!」

「ああ・・・ごめんごめん・・・」

謎の鹿みたいな生物はランボと呼ばれていた。

「ごめんなさい!!大丈夫でしたか??」

「ああ。大丈夫だ。」

「そういえばあなたたちは??見ない顔ですけど・・・」

「俺は桃里遊我。」

「俺は沢田綱吉。ツナって呼んでくれ。」

「おう。ちょっと聞きたいんだが。」

「ん？」

「ここらにデュエリストっているか？？」

「デュエリスト？？いるよ。俺たちのアジトに。」

「アジト？！マフィアかよ・・・」

「まあ・・・マフィアだね。」

「マジかよ！？」

「こつち。」

沢田綱吉は遊我たちを案内した。

「十代目！！！！お帰りなさい！」

「ただいま。獄寺君。」

「その方たちは？？」

「桃里遊我だ。よろしく。」

「獄寺隼人。十代目の右腕だ。」

「十代目？？」

「こいつはボンゴレファミリー十代目。沢田綱吉だ。」

「うお?!なんか小さい赤ん坊いる!!」

「俺はリボーン。ツナの家庭教師だ。」

「ふうん・・・」

「で、何のようだ?」

「ここにデュエリストがいると聞いてな。」

「俺のことか??」

「山本!!」

「お前がデュエリストか。デュエルだ!!」

「ん???いいぜ。始めるか。」

「「デュエル!!」」

6話『REBORN!の世界』（前書き）

再びデュエル回。

同じく名前入り。遊我のデッキが戻ってます。q

6話「REBORN!の世界」

山本武LP:4000

桃里遊我LP:4000

武:「俺のターン!!!ドロー!!!」

武:「カードを1枚セット!!!ターンエンド!!!」

遊:「何?!まあ・・・いいか・・・ドロー。」

遊:(何のデッキだ?)

武:「畏発動!!!威嚇する咆哮!このターンお前は攻撃宣言ができない!」

遊:「うつ・・・」

武:「へへへ。」

遊:「おろかな埋葬を発動。デッキからBPツインソードを墓地に送る。」

武:「BP?」

遊:「手札からBPエンジェルソフィアを墓地に送り、ダーク・グレファアを特殊召喚。」

遊:「ダーク・グレファアの効果で手札からツインソードを墓地に

送り、デッキからB Pデスサークルを墓地に送る。」

武：「B Pか・・・謎だな・・・」

遊：「墓地のツインソードとデスサークルを2体除外し、B Pゲイボルグを特殊召喚。」

武：「攻撃力3000か・・・」

遊：「このターン攻撃はできないか・・・カードを1枚セットしてターンエンド！」

武：「ドロー！終焉のカウントダウンを発動。」

遊：「カウントダウンデッキか！」

武：「カードを一枚セット。モンスターを伏せてターンエンド！」

遊：「ドロー！ブレイクコントロールを発動。手札のB Pゲイボルグを墓地に送り、B Pレッドファンブルを降臨！！」

武：「儀式も入ってるか・・・」

遊：「魔法カード！リバーブレイクを発動。お前のセットモンスターを破壊。効果は無効かだ。」

武：「くそ！」

遊：「B Pゲイボルグでダイレクトアタック！！」

武：「くっ……」

山本武LP：1000

武：「この瞬間手札の冥府の使者ゴーズを特殊召喚！！！受けたダメージと同じ攻撃力・守備力のカイエントークンを1体特殊召喚！！攻撃力・守備力は3000！！！」

遊：「ちっ……BPレッドファンゲルで冥府の使者ゴーズに攻撃。」

山本武LP：700

遊：「カードを1枚セットしてターンエンド。」

武：「ドロー！！」

武：（伏せているカードにもよるな……）

武：「魔法カード！！サイクロン！！！！お前の2枚目の伏せカードを破壊！！！」

遊：「カウンター罫発動。BPバリア。墓地のゲイボルグとツインソードを除外し効果を無効にし、破壊する。」

武：「くそ……」

武：「詰んだな……カードを1枚セットしてターンエンド……」

遊：「ドロー。相手にモンスターはいない。大嵐を発動。」

武：「くそ！！攻撃の無力化が！」

遊：「BPゲイボルグでダイレクトアタック！！！」

山本武LP：0

遊：「というわけで旅をしているのだ。」

ツナ：「そうなのか・・・俺たちもついていく??」

リボ：「いやダメだ。まだミルフィオーレファミリーとの闘いがある。また今度な。」

遊：「そうか。じゃあまたな。」

ツナ：「うん。じゃあね！」

ここでREBORNの世界は終わる。

・・・かに思われた。

????：「シシシ・・・まだ終わらないよ・・・。」

6話「REBORN!の世界」

????：「桃里遊我。俺とデュエルだ。」

遊：「何だ??」

????：「俺の名前はベルフェゴール。」

遊：「ベルフェゴール??」

ベル：「ああ。俺とデュエルだ。桃里遊我。」

遊：「あ、ああ・・・」

ベル：「シシシ・・・」

遊：「(こいつ・・・気持ち悪い・・・)」

遊：「さあ始めようか。」

ベル：「シシシ・・・」

・・・

桃里遊我LP：0

遊：「そんな・・・バカな・・・」

ベル：「シシシ・・・負けるわけねえじゃん。だって俺王子だも

ん。
」

遊：「くそ！！！」

明：「今度は俺とデュエルだ！！！」

ベル：「あ？？」

明：「今度は俺が相手する！！」

ベル：「いいぜ．．．シシシ．．．」

明：（こいつやっぱり．．．気持ち悪い．．．）

「デュエル！！！！」
「」

6話『REBORN!の世界』（前書き）

この話では明久が真のデッキを使います。
もちろんセリフの前に人の名前。

6話「REBORN!の世界」

吉井明久LP4000

ベルフェゴールLP4000

ベル：「俺のターン！ドロー！」

明：（気持ち悪いけど強いんだよな・・・）

ベル：「モンスター1体セット。カードを1枚伏せてターンエンド。」

「

明：「ドロー！！！！モンスターを1枚セット。カードを1枚伏せてターンエンド！！」

ベル：（何も動かない・・・）

ベル：「反転召喚！ライトロード・ハンターライコウ！セットモンスター1体を破壊。」

明：「召喚獣・低得点・明久-！！」

ベル：「何だ？！」

明：「効果で召喚獣・譲りたい思い・明久-を特殊召喚。」

ベル：「ライコウの効果でデッキから3枚を墓地に送る。」

1・グレイブスクワーマー

2・リミット・リバー
3・ユベル

明：「ユベルか・・・」

ベル：「シシシ・・・ターンエンド！」

明：「ドロー！！フィールドに＜召喚獣＞と名のついたモンスターがいるとき、召喚獣・ワイルドカード・瑞希・を特殊召喚！！」

明：「通常召喚！！！！召喚獣・重なる想い・明久&瑞希・を召喚！！！！」

明：「効果でこのカードと同じカードカードをデッキから1枚墓地に送る！！！！」

ベル：「ふむ・・・」

明：「魔法カード！！融合！！！！手札から、召喚獣・低得点・明久・と召喚獣・護られるだけじゃない・瑞希・を融合！！！！」

明：「俺と姫路さんの最強カード！！！！現れよ！！！！S・HERO・明希・！！！！！！」

ベル：「融合か・・・」

明：「明希の効果で墓地の召喚獣・重なる想い・明久&瑞希・を手札に加える。さらに効果でデッキから召喚獣族モンスター1体を特殊召喚！！！！！！」

明：「チューナーモンスター！！召喚獣・真の力・明久・を特殊召喚！！！！！」

ベル：「くそ！！！」

明：「レベル6の召喚獣・ワイルドカード・瑞希・にレベル2の召喚獣・真の力・明久・をチューニング！！！！！！！」

明：「大いなる力よ！！わが手に集え！！！！シンクロ召喚！！Special summon hero - MIZUKI -！！！！！」

明：「このカードこのカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上のカードをすべて破壊する！！！！！」

ベル：「くそ！！！」

明：「そして！！破壊されたカードの枚数×100ポイントのダメージを与える！！！！！」

ベル：「200ポイントごとき・・・」

ベルフェゴールLP：3800

明：「このターンこのカードは攻撃できない！S・HERO・明希・でダイレクトアタック！！！！！」

ベルフェゴールLP：1300

ベル：「シシシ・・・強いね・・・」

明：「終わりだよ・・・召喚獣・重なる想い・明久&瑞希・でダイレクトアタック!!!」

ベルフェゴールLP：0

ベル：「シシシ・・・負けたよ・・・吉井明久・・・またいずれ戦う・・・」

ベルは消えて行つた。

美：「明、あんた強いじゃない。」

姫：「かつこよかつたです!」

明：「いやあく・・・姫路さんのおかげだよ。」

遊：「しかし明久もシンクロ召喚を使うんだな。」

明：「こないだの平沢さんとのデュエルで使ってただろう?強かつたからさ。手に入れたんだ。」

明：「Special Summon HERO・MIZUKI。」

遊：「ありがとな。」

明：「うん!」

遊：「さて・・・次の旅に行くか!」

全員：「おう!!!!!!」

7話『超電磁砲の世界』（前書き）

この世界ではデュエルはありませんww
キャラたちのデュエルする姿を想像できなかったものでwwww
でもオリカは作ってブログに貼るのでw

7話　超電磁砲の世界

「ここは……でけえ……」

遊我たちは学園都市と呼ばれる所にいた。

- 学園都市。総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市。
総人口は約230万人。その8割は学生。 -

「ここにもデュエリストが……」

シュン -

一瞬女の子がいたような気がした。

動きが止まってしまった。

「何だ……?」

「どうした? 遊我?」

「一瞬女の子がいたような気が……」

「もしかして……」

「え?!」

「それはわたくしのことですか?」

「うわぁ！！！いつのまに！」

「ここは学園都市。能力を使ってもおかしくありませんわ。ところで……」

「???」

「あなたたち何学区の生徒ですの??」

「学区??学区があるのか?ここは。」

「何を言ってますの?良いですか?ここは学園都市。学生が8割を占める巨大都市ですの。」

「へえ。この世界は学生がいるのか。」

「この世界?そのセリフだどこか違う世界から来たみたいに聞こえますわよ?」

「ああ。その通りなもんでな。」

「はぁ……とりあえず、風紀委員<ジャッジメント>の第17支部に来ていただきます。」

「うん?まぁ……いいか。」

シュン・

「うわ!!!」

遊我たちは一瞬にしてその177支部とやらについた。

「いてて・・・」

「いたゝい!!」

「あいた!」

「きゃ!!」

「来たのはいいけどさ、あんた一体何者なんだ?」

「申し遅れました。わたくし、白井黒子と申します。能力名は空間移動能力<テレポート>。レベル4ですの。あ、そんなこと言ってもしかたありませんでしたね。」

「白井さん?!この人たちは??」

「ああ。さっきの被疑者捕まえた後に会いましたの。なんでも違う世界からやってきたようで。」

「ふゝん・・・あ、私初春飾利って言います。能力名は定温保存<サーマルハンド>。レベル1なんですけどね。」

「そしてあちらで仕事をなさっているのが固法 美偉先輩。能力は確か・・・」

「透視系能力<クレアボイアンス>。先輩の能力ぐらい覚えときなさい。いざというとき使えないわよ?まあ私自身能力値はレベル3だけど。」

「覚えておきますわ……」

「ふむ……今までの話を聞いたが……」

「ん??」

「さっぱりだ。能力つてなんだ。」

「えっと……まとめてみました。」

「さっすが！姫路さん！」

「まず白井さんが「空間移動能力<テレポート>」。初春さんが「定温保存<サーマルハンド>」。そして固法さんが「透視系能力<クレアボイアンス>」。これだけ大きな都市だと能力者もたくさんいそうですね……」

「そうでもありませんの……」

「え??」

「学生の中には無能力者。レベル0の人もいるんです。さっき白井さんが逮捕したのは「武装能力集団<スキルアウト>」。レベルの能力を持たない人たちが集まって犯罪を起こしていました。」

「レベルはいくつまであるんだ??」

「レベルは5まであります。これが一覧です。」

第1位。一方通行<アクセラレータ>。
第2位。垣根 帝督。能力名は未元物質<ダークマター>。
第3位。御坂美琴。能力名は超電磁砲<レールガン>。
第4位。麦野 沈利。能力名は原子崩し<メルトダウナー>。
第5位。食蜂 操祈。能力名は心理掌握<メンタルアウト>。
第6位。詠矢空希。能力名は完全反論<マジレス>。
第7位。削板 軍霸。能力名は念動砲弾<アタッククラッシュ>。

「へえ……7人だけか？」

「ええ。人口230万人の頂点はこの7人だけですわ。」

「ふん……」

「ところで……あなたたちの目的は??」

「ああ。デュエリストを探しに来た。いないか？」

「デュエリスト? 初春!」

「はい!! えっと……あ、いません。該当しません。」

「そうか……」

「そもそも。デュエリストとはなんですか?」

「この遊戯王カードを使ってバトルをするんだ。」

「ふむ……まあいないなら他をあたってくださいな。」

「ああ。すまない。じゃあ。」

「あ、まだあなた方の名前を聞いていませんわ。」

「桃里遊我。」

「吉井明久だ。」

「姫路瑞希です。」

「島田美波よ。」

「木下秀吉じゃ。（もう男じゃというのは疲れた。）」

「土屋康太……。」

「坂本雄二だ!!」

「……霧島翔子……」

「よろしく!」

「ええ。どうしますの？また旅をしますの？それともしばらくここにいますの？」

「いるって言うても泊まる場所が……。」

「それならここを貸すわ。デュエリストのことは知りたいし。しばらくいてほしいの。」

「あらまあ。固法先輩が“珍しく!!!”優しいですね。」

「“珍しく!!!”で悪かったわね!!!」

「ははは……」

（超電磁砲……御坂美琴か……会ってみたいな……正直言えば可愛かった……）

色々考えたせいか遊我たちはすぐに眠りについてしまった。

7話 超電磁砲の世界

固法の計らいで風紀委員<ジャッジメント>177支部の物置のよ
うな場所で寝泊まりをすることになったデュエリストたち。

翌日、固法は早速桃里遊我たちデュエリストにデュエルについて聞
いた。

検索をしてみてもやはり該当はしない。

固法が独自に探したところ、ペガサス・J・クロフォードという人
物が遊戯王を作ったという琴だけがわかった。

「あまり収穫はなしね……」

「聞こうと思ってたんですが、デュエリストの活動がこの風紀委員
<ジャッジメント>の活動にどう生かされるんですか??」

「あ。」

初春、固法、白井は同時に驚嘆の声を上げた。

「考えていませんでしたわ……」

「私もです……」

「わ、私も……」

とりあえず新しい情報が好きらしい。

「まあ、いいや。俺たちが旅をする目的がわかっていないことと同じだな。」

「旅の目的??」

「ああ。そんなもの無しに旅に出てきたからな。」

「そうでしたの……」

「とりあえず、この世界にいる必要はなくなった。次の世界に行く。」

(御坂美琴……会いたい仕方がない……)

「そうですか……もう行くんです……」

「すまなかったな。最初に言っておけば。」

「いえ。大丈夫ですの。」

「じゃあな。」

「ええ。」

期間はひどく短かったが、遊我たちは超電磁砲の世界を後にした。

8話 シャナの世界

世界が変わる。そんな事にはもう慣れた。

「さてと、この世界は何だ??」

「悠二!!」

「あ?!!」

「何だよシャナ。そんなに怒って。」

「シャナ??」

謎の世界だった。

「あの」

「何?!!」

「あ、いや……ここは何の世界かなって……」

「世界???」

遊我は旅をしてきたことを話した。

「ふうん……旅をね……」

「で、次はここってわけだ。」

「うん。」

「見ての通りここは戦いの世界よ。紅世の徒とフレイムヘイズが戦う世界。」

「紅世の徒？」

「うん。人の存在の力で何かを企んでるやつらよ。それを退治するのがフレイムヘイズ。」

「その紅世の徒の中に“デュエリスト”ってやついないか??」

「デュエリスト??うん……あ、」

「思い当たったか??」

「確か、ベルペオルがそうだったかも……」

「ベルペオル??」

「そう。“逆理の裁者”ベルペオル。あいつが確かデュエリストのはず。」

「わかった!!ありがとう!」

「ねえ。あたしたちもついて行っていい??」

「え?ああ。いいぜ。」

「行くわよ！悠二！！」

「待ってよシャナ！」

しばらく歩き、それぞれは自己紹介した。

「俺は桃里遊我。」

「僕は吉井明久。」

「姫路瑞希です。」

「島田美波よ。」

「土屋康太……」

「霧島翔子……」

「坂本”雄二”だ。」

「坂井”悠二”です。」

「“炎髪灼眼の討ち手”シャナ。」

「ゆうじが二人か……呼びづらいな。」

「そうね。」

そんなことを話してるうちに御崎市の河原についた。

「ここか？」

「うん。可能性はある。」

2時間がたった。その時。

「おやまあ。知らない連中が多いけど……炎髪灼眼の討ち手。見つけたわ。」

「今日の相手は私じゃない。」

「俺だ！……！」

「ん？それはデュエルディスク……デュエリストね。いいわ。相手してあげる。」

「「デュエル！……！」」

桃里遊我vs“逆理の裁者”ベルペオル。デュエル開始。

8話 シャナの世界

“逆理の裁者”ベルペオルLP：4000
桃里遊我LP：4000

ベ：「私のターン。ドロー。」

遊：（尋常じゃない気を感じる・・・勝つ！！俺は勝つ！！）

ベ：「私はフィールド魔法。ヴェノムスワンプを発動。」

遊：「ヴェノムか・・・面倒だな。」

ベ：「ヴェノム・スネークを召喚。カードを2枚セットしてターンエンド。」

遊：「俺のターン！！ドロー！」

ベ：（まだ様子見と行きましようか・・・）

遊：「手札から魔法カード、おろかな埋葬を発動！！デッキからBPゲイボルグを墓地に送る！」

ベ：「BP・・・聞いたことないわね。」

遊：「ダークグレファアを召喚！！」

ベ：「畏発動！！落とし穴！！ダークグレファアを指定！」

遊：「くそ!!」

遊：（グレファアが墓地に行ったら意味がない・・・）

遊：「カードを2枚伏せてターンエンド。」

ベ：「私のターン。」

ベ：「ヴェノム・スネークをリリース。ヴェノム・ボアを召喚!」

遊：「く・・・」

ベ：「ヴェノム・ボアでダイレクトアタック!!」

遊：「くそ!」

桃里遊我LP：2400

明：「苦戦してるね・・・」

美：「うん・・・ダーク・グレファアが墓地に行ったからね・・・」

ベ：「このままターンエンド。」

遊：「速攻魔法!サイクロン!!ヴェノム・スワンプを破壊!」

ベ：「あらまあ。破壊されてしまった。」

遊：「俺のターン!!」

遊：「終末の騎士を召喚！！」

ベ：「何も無いわ。」

遊：「よし！デッキからＢＰツインソードを墓地に送る！！」

遊：「ＢＰゲイボルグとＢＰツインソードを除外し、ＢＰゲイボルグを手札から特殊召喚！！！」

ベ：「来たわね・・・」

遊：「行け！！ゲイボルグ！！ヴェノム・ボアに攻撃！」

ベルペオルＬＰ：２６００

遊：「続いて終末の騎士でダイレクトアタック！！」

ベルペオルＬＰ：１２００

遊：「カードを１枚伏せてターンエンド」

明：「何とか持ち直したね。」

ベ：「ドロー。終末の騎士を召喚。」

遊：「同じか・・・」

ベ：「毒蛇王ヴェノミノンを墓地に送る。」

遊：「まさか・・・」

ベ：「魔法カード。死者蘇生を発動。毒蛇王ヴェノミノン復活！」

ベ：「魔法カード！ブラックホールを発動！場のすべてのモンスターを破壊！」

遊：「やばい！！」

ベ：「毒蛇王ヴェノミノンが墓地に行ったことで罨発動！！蛇神降臨。毒蛇王ヴェノミナガを特殊召喚！」

遊：「罨発動！！神の宣告！！ライフを半分払う！」

桃里遊我LP：1200

ベ：「ちつ。」

遊：「ふう……」

ベ：「カードを1枚セットしてターンエンド。」

遊：「ドロー！！」

遊：「これで勝てる！！」

遊：「手札のBPゲイボルグを墓地に送り、ダークグレファアを特殊召喚！効果は使わない。」

遊：「魔法カード！幻影の壁を発動！！デッキ又は手札からBPの幻影を特殊召喚！」

ベ：「ふむ・・・」

遊：「効果で墓地のＢＰゲイボルグを指定し、同じ攻撃力・守備力・レベルのブラックパラディントークン１体を特殊召喚！」

遊：「ＢＰレッサーキューラを召喚！」

ベ：「ふむ・・・」

遊：「さらに！！手札からバトルオンを発動！手札からモンスター１体を墓地に送り、ＢＰアクトブレインの効果が無効化して特殊召喚！」

遊：「行くぜ！！！！レベル６のＢＰアクトブレインにレベル４のＢＰレッサーキューラをチューニング！！！」

遊：「新たな破滅の勝者が闇の扉を開く！！シンクロ召喚！ＢＰゲンダンソー！！！！！！！」

ベ：「これがシンクロ召喚・・・」

遊：「サイクロンを発動！！セットカードを破壊！」

ベ：「ちっ・・・ミラーフォースが・・・」

遊：「行け！！ＢＰゲンダンソー！ダイレクトアタック！！！」

ベルペオルＬＰ：０

遊：「勝った・・・危なかった・・・」

ベ：「ふん。またいずれ戦う。その時まで待っている。」

遊：「ああ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

後で聞いた話だが、この時を境に“逆理の裁者”ベルペオルはシャナの前には姿を現していないらしい。

ここで俺たちのシャナの世界の旅は終わった。

9話　再・バカテスの世界

「さてと、次はどの世界だ・・・？」

ふと時の壁を突き抜けると、

「文月学園」

と記された建物があつた。

「文月学園だと?!」

一同驚いていた。

「戻ってきたってことか!？」

「いや・・・違う・・・ここ・・・」

「俺たちの知ってる文月学園じゃない・・・」

ガチャ。謎深き文月学園に入ってみることにした。

すると・・・

「トウリユウガ・・・オレトデュエルシロ・・・」

「誰だ?!」

「あ!!!!!!あれは!!!!」

「ぼ、僕?!」

紛れもなく吉井明久の格好をしていた。

「なんで?!僕はここにいる!!!」

「サア・・・ヤミノデュエルノハジマリダ・・・」

「ボクハヨシイアキヒサ・・・」

「ヒメジミズキ・・・」

「シマダミナミ・・・」

「サカモトユウジ・・・」

「ツチヤコウタ・・・」

「キリシマシヨウコ・・・」

全員おかしかった。

「なんだかわからないけどデュエルだ!!」

「いや、遊我。ここは俺たちがやる。自分は自分で倒す!!!」

「そうだ!!俺が本当の俺だって証明するために!!!」

「私のデッキがうずいてる・・・」

「やりましょう!」

「うん！」

「デュエル!!!!!!!!!!!!!!」

吉井明久 V S ヨシイアキヒサ

姫路瑞希 V S ヒメジミズキ

島田美波 V S シマダミナミ

坂本雄二VSサカモトユウジ

霧島翔子VSキリシマシヨウコ

土屋康太 V S ツチヤコウタ

「みんな……」

9話　再・バカテスの世界　（前書き）

各々やっていますが、ここでは姫路さんのデュエルを見ていきます。
なお、裏姫路さんは全部カタカナでしゃべるので、カード名の前後に“ ” つけます

9話 再・バカテスの世界

姫路瑞希LP：4000

ヒメジミズキLP：4000

姫：「私は私に負けるわけにはいかない!!!」

ヒ：「タオス・・・ワタシハ・・・ワタシヲ・・・」

姫：「私のターン!!!」

姫：（もし私と同じなら、アルカナフォースを使ってくるはず・・・裏をかいたこのデッキで!!!）

姫：「黒竜の雛を召喚!!!」

ヒ：「・・・・・・・・」

姫：「黒竜の雛の効果発動!!!このカードをリリースして、真紅眼の黒龍を特殊召喚!」

ヒ：「・・・・・・・・」

姫：「カードを2枚伏せてターンエンド。」

ヒ：「ワタシノターン・・・“終末の騎士”ヲシヨウカン・・・

」

姫：「ダークグレファア?!!」

ヒ：「ワタシハデッキカラ“インヴェルズの斥候”ヲボチニオクル・
・・・」

姫：「インヴェルズ?!」

ヒ：「カードヲ2マイフセターンエンド・・・」

姫：「ドロ・・・」

姫：（今の動きであいつのデッキがインヴェルズだってことはわかったけど・・・）

姫：「黒竜の雛を召喚!!!そして魔法カード、モンスターゲートを発動!!」

ヒ：「・・・」

姫：「黒竜の雛をリリース。デッキの上から通常召喚可能なモンスターが出るまでめぐり、それ以外を墓地に送る。召喚可能なモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。」

ヒ：「・・・」

姫：「1枚目!!!」

●サンダー・ブレイク

姫：「2枚目!!!」

●死者蘇生

姫：「3枚目!!」

●レッドアイズダークネスメタルドラゴン

姫：「来た!!!レッドアイズダークネスメタルドラゴンを特殊召喚!!」

ヒ：「……………」

姫：「レッドアイズダークネスメタルドラゴンの効果を発動!!!1ターンに1度、自分の手札または墓地からドラゴン族モンスター1体を選択し特殊召喚!」

姫：「選択するのは!!!手札から青眼の白龍を特殊召喚!!」

ヒ：「……………」

姫：「さらに魔法カード、古のルールを発動!!」

ヒ：「……………チッ」

姫：「手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚!!」

姫：「青眼の白龍を特殊召喚!!」

ヒ：「……………」

姫：「よし…………青眼の白龍2体でオーバーレイ!!!!2体のモ

ンスターでオーバーレイネットワークを構築！！エクシース召喚！！！！」

姫：「来て！！最強にして最凶！！サンダーエンドドラゴン！！！！」

ヒ：「・・・・・・・・・・」

姫：「サンダーエンドドラゴンの効果！！エクシース素材を取り除いて、このカード以外の全てのモンスターを破壊する！！！！」

ヒ：「・・・・・・・・・・チツ」

姫：「行つて！！サンダーエンドドラゴン！！ダイレクトアタック！！！！」

ヒメジミズキLP：1000

姫：「私はカードを2枚セット。ターンエンド。」

ヒ：「ワタシノターン・・・・・・・・」

ヒ：「フィールドニモンスターガイナイカラ・・・・・・・・“インヴェルズの魔細胞”ヲトクシユシヨウカン・・・・」

姫：「・・・・・・・・・・」

ヒ：「“インヴェルズの魔細胞”ヲリリース・・・・・・・・」

ヒ：「“インヴェルズ・ギラファ”ヲアドバンスシヨウカン・・・・」

姫：「何?!」

ヒ：「コウカヲツカッテ・・・サンダーエンドドラゴンヲハカイスル・・・」

姫：「やばい!」

ヒ：「1000ライフポイントカイフク・・・」

ヒメジミズキLP：2000

ヒ：「ダイレクトアタック・・・」

姫路瑞希LP：1400

ヒ：「ターンエン・・・」

姫：「速攻魔法!サイクロンを発動!!セットカードを破壊!」

ヒ：「“侵略の波動”・・・」

姫：「私のターン!!--」

姫：「(来た!!--)」

姫：「墓地に存在する、レッドアイズダークネスメタルドラゴンと青眼の白龍を除外して、ダークフレアドラゴンを特殊召喚!!--」

ヒ：「・・・」

姫：「効果を使って手札の神龍アポカリプスとデッキのダークアームドドラゴンを墓地に送り、お前の墓地のインヴェルズの斥候を外！！」

ヒ：「……………」

姫：「さらに装備魔法！D（ディアファレント）・D（ディメンション）・R（リバイバル）を発動！！」

ヒ：「……………」

姫：「手札の闇の仮面を墓地に送り、除外されたモンスターを1体特殊召喚！！」

姫：「来て！！レッドアイズダークネスメタルドラゴン！！！！」

姫：「このターンで決着をつける！！！！」

ヒ：「！！」

姫：「畏発動！！リビングデッドの呼び声！！！！墓地の青眼の白龍を特殊召喚！！」

姫：「レッドアイズダークネスメタルドラゴンでインヴェルズ・ギラファを攻撃！！！！」

ヒメジミズキLP：1800

姫：「とどめ！！青眼の白龍でダイレクトアタック！！」

ヒメジミズキLP：0

ヒ：「・・・・・・・・ナルホド・・・・・・・・コレガ・・・・・・・・ワタシノ・・・・ワタシシンノツヨサ・・・・・・・・」

他のみんなもデュエルを終えたみたい。

姫：「みんな大丈夫?!」

明：「大丈夫!」

美：「うん!」

雄：「おう!」

翔：「うん・・・・」

土：「うん・・・・」

遊：「すまない・・・・・・・・みんな・・・・・・・・」

明：「気にしない気にしない!!」

遊：「明久・・・・」

????：「調子に乗るなよ・・・・・・・・桃里遊我・・・・・・・・」

遊：「誰だ?!」

???：「いずれお前の前に現すものだ・・・話すのは初めてだね・・・」

遊：「これもお前の仕業か!？」

???：「“お前”ではない・・・“お前たちだ”・・・我々は組織で動いている・・・」

遊：「組織で?!何が目的だ!!!」

???：「これ以上は言わん・・・じゃあな・・・」

遊：「待て!!・・・何者なんだ・・・」

雄：「これは俺の仮説だが・・・遊我。お前は命を狙われているんじゃないのか？」

遊：「命を？」

雄：「ああ。今までこんな世界はなかった・・・だとすると・・・急にこんな世界に入ったのはおかしい・・・もしかしたら遊我だけじゃなく、俺たちも狙われているのかもしれないな・・・」

遊：「・・・」

明：「遊我??」

遊：「お前らはもう元の世界に帰った方がいい・・・」

明：「どうしてさ??」

遊：「雄二の言った通り俺が命を狙われているならお前らに迷惑がかかる。俺だけで戦える。」

明：「何言ってるのさ！！僕たちは仲間でしょ！！」

美：「そうよ。私たちも戦うわ。」

雄：「無論俺もだ。」

翔：「私も・・・」

土：「俺もだ・・・」

遊：「みんな・・・ありがとう・・・じゃあ、次の世界に行くか・・・」

全員：「おう！！！！！！」

こうして次の世界に行くことにした。

???：「ちっ・・・明久の奴・・・上手くいけば遊我を一人だけにして狙いやすくなったものを・・・くそが・・・」

謎の声がした。

10話 遊我のカード

「そういえばさ、遊我の持ってるB Pブラバディンっていうカード??あれは何??」

「ああ。あれは3年前に武藤遊戯さん・遊城十代さん・不動遊星さん・九十九遊馬さんのそれぞれと旅した時・・・」

- 3年前 -

不動遊星編

「大丈夫か?遊我君。」

「はい。大丈夫です。」

「まさか、こんな道に出るとわな・・・」

「はい・・・」

「ククク・・・不動遊星・・・俺とデュエルだ・・・」

「何者だ?!」

「正体は明かさない・・・まあ、別の世界からのデュエリストだ。」

「別世界からのデュエリスト?」

「そんなことはどうでもいい。デュエルだ。」

「ああ．．．いいぜ．．．」

「デュエル!!!」

．．．．．

不動遊星LP：0

「俺が．．．負けた．．？」

「ふん．．．弱いな．．」

「遊星さん!!!今度は俺が!」

「頼む．．．」

「ほう．．．貴様何者だ．．．」

「俺は桃里遊我!!!!!!」

「桃里遊我．．．いいだろう．．．」

突然遊我のデッキが光りだした。

「なんだ?!」

デッキの内容を見ると、内容が大きく変わっていた。

- 現在 -

「それがこのBPだ。^{ブラバラディン}何とかこれで勝てた。」

「そうか……」

「ちなみにこれが不動遊星さんのエースカード。 “ スターダストドラゴン ” 。

「スターダストドラゴン……」

「とりあえず、ここで固まっても仕方ない。歩きながら話す。」

「うん。」

10話〈遊我のカード〉

遊：「BP^{ブラバラディン}については説明する。」

遊：「まず、効果として墓地の悪魔族モンスター2体を除外すれば特殊召喚できる。」

遊：「ただし、死者蘇生では戻ってこれない。」

明：「なんで??」

遊：「蘇生制限だ。こいつらの場合、くした場合のみ>の記述が見えるか?」

明：「うん。」

遊：「この記述があるモンスターは基本的にこの召喚条件でしか召喚できない。」

遊：「姫路さんが持っている“ダーク・アームド・ドラゴン”も同じだ。」

明：「ちよつと見せてね。・・・本当だ!<墓地に闇属性モンスター3体のみの場合特殊召喚できる>って書いてある。」

遊：「そう。それが蘇生制限。」

遊：「この記述を持ったモンスターたちでできたデッキが俺のBP^{ブラバラディン}だ。」

明：「そうか……ありがとう！」

遊：「ああ。あとは基本的にこいつらはレベルが10だ。属性は闇。族性は悪魔。攻撃力は基本的に3000。守備力は0だ。それらをサポートするカードも入っている。もちろんフィールド魔法もな。」

明：「そうか。だから強いんだね。でも守備表示にしたら弱くなる。それがデメリットか……」

遊：「ああ。それをカバーできるカードも入っている。大丈夫だ。負けることはない。」

遊：「さて、旅を続けようぜ!!」

全員：「おう!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7686z/>

俺たちのカード！！

2012年1月9日20時45分発行